

# 小正月火祭り行事の比較考察

## — 燃え盛る炎に人々は何を託したか —

菊地 和博

小正月火祭り行事とは、門松やしめ飾り、護符、お札、ダルマ等を各戸から一定の場所に集め、ワラなどとともにそれらを高く積み上げて焼くもので、主として1月15日の小正月に行われている。この火祭り行事は全国に分布しており、呼称は「どんと祭」「どんと焼き」「オサイト」「サイノカミ」が多いが、近畿地方などを中心に「左義長」という呼び名もある。本稿では、東北地方ではみられない火祭り行事である「左義長」について、滋賀県近江八幡市・神奈川県大磯町・富山県勝山市に事例を求めた。また東北地方の事例として仙台市大崎八幡宮で行われる「どんと祭」（明治時代頃までは「松焚祭」）を取り上げ、さらに東北各県の実態も取り上げた。これらの広域的事例を比較検討してそこに見出されるものの分析・考察を試みた。その結果として、火祭り行事の背景にある考え方や共通する民俗的意味を導き出しつつ、火祭り行事は「神送り」であるとの従来の見方に対して「神迎え」ではないのかという疑問と仮説を提示した。意図するところは、これらを通して全国にみる小正月火祭り行事とは何かの本質を考えてみようとしたものである。

### はじめに

全国にある同じ小正月火祭り行事といっても、地域的個別的にみていけば、かなり異なった姿や要素があるのではないかと考えられる。本稿では東北地方にはみられない左義長というものに着目し、その実態はどのようなものか、遠方の事例として詳細にみてみることにする。一方、東北地方において大規模な火祭り行事として知られる仙台市の大崎八幡宮どんと祭や東北地方のそれに類する事例も取り上げてみる。以下に、左義長や大崎八幡宮どんと祭などを広域的視野で比較検討し、小正月火祭り行事の民俗的類似性や差異性、そしてあらたな検討課題等を明らかにしてみようと思う。

### 1. 左義長の火祭り行事

小正月の火祭り行事を左義長と呼ぶのは、近畿地方を中心に山陰、北陸の各地方、

および愛知県などの一部地域においてである。左義長は古くは三毬杖・三毬打・三鞠打などと書かれてサギチョウ・サギッチョと呼ばれた。そもそも木製の毬を杖で打ち合う正月の遊びであり平安時代末期の「年中行事絵巻」にも描かれている<sup>(1)</sup>。その遊びで破損した毬・杖を集めて燃やしたのが火祭り行事のサギチョウの起源ではないかと考えられてきた。

『徒然草』には宮中の「さぎ丁」について、「正月打ちたる<sup>さぎちよう</sup>毬丁を真言院より神泉苑へ出て焼き上ぐる也」(第180段)と記している<sup>(2)</sup>。天文末～永禄初年頃(1550年代)成立の「上杉本洛中洛外図屏風」のなかには京都市中に作られたサギチョウ4基が描かれている<sup>(3)</sup>。うち3基は大型で太い青竹3本が三脚状に組み立てられ円錐状に藁が巻き付けられている。円錐の先端部分には1本の笹竹が付けられ、そこには結わえられた紙の御幣が数本たなびいている様子が見える。すでに現在みられる一般的な左義長の原型が出来上がっている。

なお、柳田国男は「神樹編」のなかで左義長の起源問題に触れているのが注目される。そこには、3本の竹や木を括って三脚にしたのを本来はサギチョウと呼んだのだと記されている<sup>(4)</sup>。沖縄では御幣を付けた3本組の竹の芯を今でもサギッチョといっている。このサギッチョの呼称は後に記す富山県勝山市の左義長にも通じる。

ここで取り上げる小正月の左義長は、西日本の滋賀県近江八幡市、関東地方の神奈川県中郡大磯町、そして北陸地方の富山県勝山市の3か所である。それぞれが左義長の地域的特徴を良く保っており、各地の小正月の火祭り行事、とりわけ東北地方において特徴的な大崎八幡宮のどんと祭と比較考察するのにふさわしいと考えられる。以下に簡潔に概要と特徴を述べてみる。

#### (1) 滋賀県近江八幡市の左義長祭

『近江八幡の火祭り行事』によれば、平成10年現在で左義長の呼称で行われているのは市域の76地区に及ぶ<sup>(5)</sup>。さらにドンドが4地区、注連縄焼きが1地区である。旧八幡町の左義長は明治時代以前小正月1月14日・15日に行っていたが、現在は3月中旬の土曜日(渡御)と日曜日夜(奉火)に行っている。13の地区では2、3か月かけてそれぞれ左義長1基がつくられるが、2日目の「奉火」では夜8時頃から順番に左義長に点火される。最後13番目の左義長に点火されるのが11時近くであり、長い時間をかけてすべての左義長が燃やされる。

近江八幡市の左義長は藁・竹などの円錐状に高くした一般単純形ではない。つまり左義長の構造は、藁の松明部分の「台」、海の幸・山の幸を使い今年の干支をあしらった作り物の「ダシ」、飾り物である「<sup>ジュウニンガツ</sup>12月」のおおよそ3部分から成り立っている。いわば祭りの山車のようなものでこれを人々は担いで練り歩く。日数をかけ華やかなものに仕上げられた各種左義長を女装した若者などが異形の姿で担いで市内を巡行する。この火祭り行事は大勢の見物客で賑わうようになり、山車を伴う祭礼に近い祭り行事として発展している。

ここで、左義長実施の76地区にはいくつか共通する部分があるので、『近江八幡の火祭り行事』にしたがって記してみる。

- 一、正月飾りは焼くが、その際に古いお札などは一緒に焼かない。
- 二、その火で餅などを焼いて食べると無病息災となる。

三、残り火を持ち帰り、それで小豆粥などを炊く。燃え残りの竹をガス台の上に一度置いてから粥を炊くという家もある。残り竹を味噌壺のそばに置くと味噌が酸っぱくならない。

四、正月の書き初めや色紙の縫い物を火で燃やすと上手になる。

くりかえしになるが、近江八幡の左義長は「台」「ダシ」「十二月」からなる華やかなもので、他にはみられない祭礼行事化した火祭りの特異性を示している。しかし一方では、火を燃やすことについての呪術的な考えや行為において全国の小正月火祭り行事と共通する部分も少なくない。

## (2)神奈川県中郡大磯町の左義長

大磯では左義長のほかに、サイト・サイトヤキ・サイトバライなどとも呼んでいる。明治の頃から左義長と呼ばれるようになったという<sup>(6)</sup>。この祭り行事は相模湾に面する海沿いの9つの町内で毎年1月14日に行われてきたが、近年では1月の第三土曜日に行われるようになった。

『神奈川県史 各論編5 民俗』などによって以下に概観してみる<sup>(7)</sup>。それによると、大磯の左義長はいくつかの民俗行事が複合して成立している。つまり、左義長を大きく捉えれば、前年の12月8日に「一番息子」という行事から始まっている。9町内の子どもたちはこの日、それぞれいくつかのグループを編成して縄でしばったゴロ石を持って家々をめぐり、病魔を追い払い幸福が訪れるよう唱えごとをしてお賽銭をいただく。ゴロ石とは、道祖神であるサイノカミの祠に置かれているものである。翌年1月11日早朝平塚市に竹や松を買いにいく行事（マツカイ）から3日間、子どもたちは町内ごとに木造で組み立てたオカリコ（御仮籠）と称する御仮屋に籠る。オカリコには奥正面にサイノカミが祀られる。その傍らには提灯や5色の紙で作った吹き流しなどを飾った竹を立てる。これをオンベといっている。この3日間で町内の人々は山王地区を除く8か所のサイノカミを巡拝（ナナトコマイリと称す）して歩き、子どもたちが無病息災で暮らせるように祈願する。ここまではサイノカミ（道祖神）の祭りと仮小屋をつくる鳥追い行事が習合した側面が認められる。

さて、翌日左義長の本番ともいえる1月14日を迎える。早朝にはオカリコを壊して北浜海岸（大磯海水浴場）には9町内ごと9つのサイトが作られる。オンベ竹などを芯として立てて門松や注連縄、しめ飾り、ダルマなどの正月飾りや縁起物を円錐形に積み上げて藁で包み込んで完成させたものである。その高さは7、8メートルにもなり巨大な藁の塔が浜辺に林立する。各サイトから少し離れた集落側にはサイノカミの祠や石像を置く。さらに、サイトの傍らには海側に向けてサイノカミの仮宮が作られる。

サイトは夜7時頃に点火されて燃え上がる。これをサイトバライともいっている。かつてはアキの方角から順次燃やしたが現在はこの限りではない。木の枝につけたり竹竿の先に吊り下げた福団子をサイトの火であぶって食べるのが慣習である。

燃え上がった頃に下帯姿の青年たちが海に入り、浜辺にいる子どもたちとそれに加勢した大人たちの間で「ヤンナゴッコ」と呼ばれる綱引きが行われる。青年たちは魚に見立てられて必ず浜辺に引き上げられ子どもたちが勝つのである。その後、下帯姿の青年たちは伊勢音頭を歌ったりしながら各町内に引き揚げ、町内一巡した後サイ

ノカミの前で大声で歌い、手締めをして終了する。ようするに「ヤンナゴッコ」は豊漁への予祝行事の側面が強い。

以上のように、大磯の左義長は関東地方を代表する大規模な火祭り行事で多面性をもっている。「一番息子」「サイノカミ」「オカリコ」「ヤンナゴッコ」などにみられるように、鳥追い、道祖神祭り、予祝行事など複合的な民俗要素から成り立っていることがわかる。

### (3)富山県勝山市の左義長

『勝山市史 第1巻 歴史と風土』によれば、「勝山左義長」が文献にみえるのは元禄4年(1691)小笠原公の勝山入部からであるという<sup>(8)</sup>。左義長は少なくとも江戸時代には行われていたといえる。それまでは小正月15日に行われていたが明治になってから2月に移行している(現在は2月最終土・日)。地元では2日間の一連の祭り行事を「サギッチョ」といっているが、最終日の火祭り行事を「どんど焼き」とも称する点は留意したい。

小正月の火祭り行事として基本的に全国と共通しているのは、竹や木などを支柱にして藁や杉などを巻き付け、注連縄やお札などを高く積み重ねてそれを燃やすことである。しかし勝山左義長には他の左義長祭りにはみられない特徴がある。まず、「太鼓やぐら」という二階建ての櫓やぐらを作りその中に数人の奏者が乗り込む。やぐらには「歳徳大明神」と書かれた額を掲げるものもある。その中で演奏されるのは「左義長太鼓」「左義長ばやし」である。赤系統の長襦袢を着た太鼓たたきは、三味線や鉦、笛とともに体をくねらせながら面白おかしい動作で元歌に合わせて太鼓を打ち鳴らす。この高さ約6メートルもある太鼓やぐらは町内ごと12基つくられている。

最終日夜のフィナーレに燃やされるものを「松飾り(ご神体)」といっている。それは各太鼓やぐら上手に高さ4メートルの松4本を組んで杵組みを作り、注連縄を張り、青竹を結び、御幣や円形の扇を立て、「歳徳大明神」などの文字を掲げたものである。最終日に太鼓やぐらから「松飾り(ご神体)」が切り離され、九頭竜河原に担ぎ出され一斉に燃やされる。これを地元ではどんど焼きといっていることは冒頭に記したとおりである。

どんど焼きは若連中によって午後8時から10時頃まで燃やし続けられる。点火の際に周囲にいる子どもたちは雪を投げて消そうとし、若連中はまた火をつけ、このような攻防を繰り返すのが伝統であった。こうして火が燃え盛っているあいだ「サギッチョチョイヤ 長兵衛のかか目をむいた」などと皆で囃し立てたのである。

また期間中、太鼓やぐらでの演奏が行われる各町内の会場には、「作り物」「絵行灯」「押し絵」なども華やかに展示し飾られ、2日間にわたる祭りを盛り上げる役割をはたしている。

このように勝山市の左義長まつりは、太鼓やお囃子が演奏されて著しく芸能化が進んでいることが特徴である。一方で、どんど焼きの共通呼称であること、松飾り(ご神体)を焼いたその火で餅を焼いて食べると健康になる、など全国的に通じる小正月火祭り行事の側面を伴っていることは興味深い。

## 2. 大崎八幡宮のどんと祭と裸参り

仙台市大崎八幡宮のどんと祭は、1月14日午後到大崎八幡宮の境内で宮司とその他神職によってうやうやしい神事が行われ、その後「点火の儀」によって始まる。「点火の儀」では、1月1日の「採火式」でとられた火種の「忌火」（穢れを清めた神聖なる火）を松明に移して、参拝者が投じた松飾り・門松・注連縄・ダルマなど正月の縁起物などが小山のようにうず高く積まれたものに四方から点火する。点火された小山は赤々と燃え続ける。夜空を焦がすほど高々と炎が舞い上がるがこの火を「御神火」と呼んでいる。この火は翌朝まで燃え続ける。参拝者は夜中じゅう絶えることがない。

大崎八幡宮の火祭り行事は明治時代頃までは松焚祭といわれてきた。文字どおり正月の松飾りや門松などを燃やしたことに由来する。このどんと祭においては、一般に燃え盛る火にあたると心身が清められ、一年間無病息災でいられ、しかも家内安全であるというような火に対する民俗信仰は根強く伝承されている。このような点では、他地域の小正月の火祭り行事と本質的には変わらないといえよう。

大崎八幡宮のどんと祭は、小正月の火祭り行事に裸参りが加わって賑わうことでも知られている。どんと祭の賑わいの最大要因は裸参りであるといっても過言ではないくらいである。この火祭り行事は、およそ7万人以上の人出で賑わうというが（「河北新報」平成16年1月9日記事）、かつては15万人から20万人ともいわれた（「河北新報」昭和40年1月14日記事）。そこには見るもの見られるものの二重構造が成立し、露店も境内に所狭しと立ち並ぶ。この人出の多さや賑わいぶりは、裸参りが酒造関係者を中心とする時代から多様な職業に関係する人々が自由に参加する時代へと移ってきたことと密接にかかわっているようである<sup>9)</sup>。

裸参りは近年では仙台市内を中心に、酒造関係者以外に会社・事業所、病院、大学・学校等から団体を組織して参加している。その中には女性の参加者も数多い。家族単位や個人参加もある。平成4年には仙台市による「成人裸参り実行委員会」が組織されて新成人による裸参りも奨励、実施されている。

裸参りへの参加は事前に大崎八幡宮へ申し込み、お守り代と昇殿料と1,000円を支払えば誰でも参加できる。近年の裸参りは酒造というほぼ限定された職業人の参拝から、多様な職業人や学生などの参拝へと変容している傾向がつかめる。このようにどんと祭は神道色を根底に持ちながらも、裸参りなど諸要素を加えていっそう民俗色を帯びているといえる。

宮城県は地域住民が行うどんと祭、オサイトなどの火祭り行事はもともと盛んでない地域であった。しかし、昭和50年代以降から各地の神社や町内の近くの公園などで「ミニどんと祭」が広がり始めたといわれる。それは大崎八幡宮の火祭り行事の影響が周辺各地に及んだ結果とみられているのである。それでいて、発端ともいえる大崎八幡宮のどんと祭そのものが衰退の方向をたどっているわけでもない。

どんと祭を媒介にして成り立った火祭り行事の民俗社会の構造は、お社と人々のくらしはどんな結びつきにあるのかという点において、大変興味深い関係性を示している。火祭り行事の構造の中心にある大崎八幡宮の古態の松焚祭は民俗化したどんと祭として発展し、それは今や全国でも特色ある小正月の祭礼行事として位置づけることができる。

どんと祭については、『大崎八幡宮の松焚祭と裸参り調査報告書』において新聞記事を含めた多史料を駆使したじつに詳細な歴史的検証がなされている<sup>10)</sup>。そこでは、先行する名称の松焚祭がやがてどんと祭に変更されていく過程も明らかにされている。

### 3. 東北の小正月火祭り行事

以下は文化庁の補助事業として編集された『北海道・東北地方の祭り・行事1・2』に掲載された東北各県の『祭り・行事報告書』（平成5年以降に各県教育委員会ごと発刊）を基本に、その他の資料も加えながら東北地方を中心に概観してみたものである<sup>11)</sup>。

『祭り・行事報告書』の作成にあたっては、各県で市町村ごとに調査担当者を依頼して、全国統一した調査項目に従い現況をカードに記載する方式をとっており、データ収集に遺漏のないように努めている。筆者も山形県調査執筆委員の一人としてかかわった経緯から、このデータは一次資料として信用度の高いものであり、調査時点での各県の火祭り行事の実態をかなり正確に反映しているものと捉えている。

#### (1)青森県

青森県内ではどんと焼き、ドント焼きが3か所にみられるだけで、火祭り行事を伴うサイノカミ（塞の神）、オサイトは1か所もない。

#### (2)秋田県

秋田県内では道祖神、賽の神、どんと焼きの行事は県北2、県央3、県南4の合計9か所にみられる。また、秋田県仙北地方の一部に小正月の火祭り行事を天筆または天筆焼きと言っている地区がある。大仙市（旧仙北町）杉の下地区では、1か月遅れの2月15日に約3メートルの高さの木に積み重ねられた藁束（これを天筆と称す）に火を放つが、「天筆和合楽 地福円満楽皆今満足」と書かれた色紙をその火で燃やす。同じような天筆焼きは、大仙市（旧太田町）南小神成地区・旧中仙町豊岡地区、仙南村四ッ谷地区などにみられる。

#### (3)岩手県

『岩手県の祭り・行事調査報告書』には、小正月の火祭りについて実施報告がまったく掲載されていない<sup>12)</sup>。また、岩手県立博物館発行図録の『火とまつり』には、小正月の火祭り行事についての全国的解説はみられるものの、岩手県内の事例が1件も記載されていない<sup>13)</sup>。ただし、写真が1枚掲載されており、題して「とんどの火を拝む」（盛岡市・教浄寺）とある。教浄寺とは1月14日に行われる裸参りで知られた寺院であるが、その境内の一角でとんどは行われているようである。

#### (4)宮城県

『日本の民俗 宮城』では、「宮城県下には他地方のトンドのような松焼きの正月送りは仙台市の大崎八幡神社以外にはないらしい。」と記している<sup>14)</sup>。ただし、先に述べた『大崎八幡宮の松焚祭と裸参り調査報告書』では、「宮城県内には数少ないとは

言いつつも、正月飾りを焼く行事が山間部の七ヶ宿や仙台市の大倉地区、加美郡などに残されている」とある。

『宮城県民俗分布図』では、小正月の火祭り行事として、仙台市大崎八幡宮のどんと祭と蔵王町の刈田嶺神社境内で行っている暁参りの2か所だけを取り上げている<sup>15)</sup>。暁参りは14日から15日にかけて大火を焚き正月の飾り等を持って来て焼くとある。明治時代にはすでに行われていてお札を焼くのが行事の中心だったようで、戦後になって正月の飾りが焼かれるようになったという。また、火祭り行事の廃絶したものとして七ヶ宿町の4地区でオサイドヤキが1月15日に行われていたことを記載している。

なお、『宮城県の祭り・行事調査報告書』の「宮城県の行事」では、どんと祭は大崎八幡宮に限られた行事であったが、昭和後期になると大崎八幡宮にならってしだいに行われるようになり、昭和50年代になると全県に普及し、平成10年正月に仙台市内だけで179か所で行われた（仙台市消防局届け出）と詳細に記している<sup>16)</sup>。これは町内の公園などで行われた小規模などんと祭を含めた件数であろうと思われる。

#### (5)山形県

山形県内の小正月の火祭り行事は、『山形県の祭り・行事調査報告書』によれば、113か所にもものほりじつに盛んに行われてきたことがわかる<sup>17)</sup>。このなかで全県的にはオサイド（「お柴灯」・「お斉灯」など）の呼び名が最も多いが、山形市や天童市、中山町などではイワイワイ（祝い祝い）とも言っている。県南部にあたる置賜地方の川西町、長井市、白鷹町、飯豊町などではヤハハエロ、小国町ではサイズ（サエズ）焼きなどの呼称も特徴的であり内容も他地域と異なる要素をもっている。秋田県でみられた天筆の呼称はないものの、山形市西部地域でオサイドに「天筆和合楽 地福皆円満」などと書いた半紙を燃やし習字の上達を願う行為が3か所あり両者の共通性がみられる。

ヤハハエロとは、円錐形に積み上げた藁束を燃やしながら「ヤハハエロ、貧乏の神もってって果報持って来い」（川西町）、「ヤハハエロ、ヤハハエロ、センキセンバコ、ミナモテンゲー」（長井市）、「ヤハハエロ、目くそ鼻くそ飛んでんげえー、出もの腫れもの、せんきすんばこ吹っ飛んで行げー」（白鷹町鮎貝）などと叫ぶ。ヤハハエロの名称はこれらの唱えごとからきているが、元来サイトウ焼きとも言っている。

また、小国町のサイズ（サエズ）焼きは火が燃え盛るとき周囲の人々は声をそろえて大声でアハハ、アハハ、アハハと3度笑う。これをサイズ（サエズ）笑いといっている。ちなみに、小正月の火祭り行事で笑うという行為は、長野県北安曇郡小谷村黒川や飯田市周辺、および静岡県富士山麓から北伊豆にかけて分布している。これらの地域ではおんべ焼き（おんべ笑い）といっており、火が燃え盛るなか皆で悪口や卑猥な言葉で囃し立て大笑いする。小国町のサイズ（サエズ）焼きと相通じる面があるといえる。

一方、庄内地方の酒田市・遊佐町・鶴岡市温海地区などでは、火祭り行事はサンド小屋・サイド小屋などという呼称が目立つ。これは子どもたちが作る仮小屋のことで、その中にサイノカミ（塞の神・道祖神）を祀ってのちに小屋ごと燃やすのである<sup>18)</sup>。これは中部地方に多いサイノカミや先にみた大磯のオカリコ（仮小屋）に通じる。

## (6)福島県

『福島県の祭り・行事調査報告書』によれば、小正月の火祭り行事はサイ（歳）の神35か所、どんど焼き13か所を数えることができる<sup>19)</sup>。サイ（歳）の神行事は会津地方に集中的にみられるのが特徴であり、平成14年現在26か所で行われている。サイ（塞）の神の呼称が圧倒的に多いが、一部におんべ焼き、おんべの呼び名もある。会津地方でもとりわけ三島町では11地区でじつに盛大な小正月の火祭り行事が行われているのが特徴である。

以下、『サイの神調査事業報告書 三島のサイの神』によってこの火祭り行事について各地区にはほぼ共通する部分を概観してみる<sup>20)</sup>。行われる時期はほとんどが1月15日であり、その日が平日であっても以前からの慣習にしたがって日曜・祭日などに移行せずに実施している。担い手は現在は区長や組長であるが、かつては子供組であり、さらに若衆の青年たちが手伝うところが多かった。サイの神はアキの方角の山から切り出してきた神木に藁や豆がら・米粉がらを巻き付け、また根元には門松、注連飾り、お札、ダルマなどを積み上げたものもあり、やや円錐形ではあるが地域によって多様なかたちをしている。なかには十字形のかたちもある。さらに神木の先にはオンベを付ける。オンベとは紙製の「御幣」の意味で和紙を何枚も重ねて作るが、これに扇子や紙垂などをつけたり「歳徳大善神」と書かれた紙札などを含めた様々な作り物全体をさす言葉である。

サイの神は現在は1本を立てる地区もあるが、多くは大小2本をセットに立てている。地区によっては、大きいほうを「男サイの神」、小さいほうを「女サイの神」または「子どもサイの神」と称している。サイの神をつくる作業には女性はまったく加わらない。点火はその年のアキの方角から人数によって3か所や5か所から行う。中心に立てられた神木などがすべて燃え落ちると、取り囲んでいた人々は一斉に餅やスルメを焼き始める。団子を持ち込む地区は少ない。

燃え盛るサイの神の周辺を厄年に当たる人や初婚2人ずつ腕を取り合いながら左から3回あるいはそれ以上を回り、最後は胴上げをされて雪の中に放り投げられる慣習もみられる。これを「胴突き」といい厄払いの意味で行っている地区もある。

また、サイの神には様々な年占いや呪術がともなっている。各地区ともに火の勢いが良い、あるいはオンベに早く火が移ると豊作になるといっている。逆にオンベまで火が燃え移らないと異変が起きるといいう地区もある。他方、火で腹を温めると腹痛みしない、悪い所を温めると治る、煙を頭かけると頭痛が治る・頭が良くなる、燃えた炭や灰を顔に塗ると頭痛や歯痛をしない、風邪をひかない、無病息災でいられる、などじつに多様な呪術性がみられる。

## 4. 考察

## (1)左義長・オサイト等の共通性と民俗的意義

小正月の火祭り行事をどんと祭、どんどん焼き、オサイト、サイノカミなどと呼称しているのは東北地方や関東・中部地方さらに新潟県など主として東日本である。ただし、どんと祭、どんどん焼きの呼称は先にみた近江八幡市の左義長地域内のどんと、さらに富山県勝山市の左義長のフィナーレどんどん焼きもあるように広域的分布がみら



れる。

この小正月の火祭り行事は先にみた神奈川県大磯町の左義長のように、道祖神祭りや子どもたちが小屋に泊まる鳥追い行事などと一体化している地域も少なくない。特に道祖神祭りは関東西南部や中部地方にその傾向が強くみられる。

オサイトの語源は、修験者が火の浄化力を願って行う「柴燈護摩」<sup>サイトウゴマ</sup>に起因すると考えられている面もある。また、サイノカミは悪霊の侵入をさえぎる塞の神<sup>サエ</sup>＝道祖神（道陸神）であるという見方があり、東日本の小正月行事も左義長と同様に様々な民俗要素が習合している場合が少なくない。

これまでみてきた左義長またはオサイト、どんと焼きなど全国の小正月の火祭り行事には大いに地域的差異や特性が認められる。一方ではその同一性や共通部分もまた認めることができる。それらは、日本列島において本質的に同じ小正月の民俗的な祭り行事ととらえることができるだろうか。それを可能とする解釈として、人々はあらたな転換を期待するときに火の更新を求める心意があるといわれてきた。つまり、日差しが衰えて寒さが頂点に達した冬の時節に、太陽の再生や活力の回復を期待して人々は火を燃やすという捉え方である。

他方、小正月の火祭り行事はお盆の火祭り行事と対比して考えることができる。お盆は餓鬼仏・無縁仏、祖霊を迎えて鎮魂し、丁重に送り出す行事で、迎え火や送り火、高灯籠などの火や明かりを目印としている。正月の行事も歳徳神という年神様（つまり祖霊）を迎えて送るものでお盆と本質を同じくしている。お盆と正月の行事について、1年を大きく二分する節目という意味で、年中行事の両分性ともいわれている。

ここで、各地の小正月の火祭り行事にかかわる民俗について整理してみたい。1月15日の小正月の火祭り行事では、多くの地域で年神様は燃やされる煙にのって帰っていくと考えられている。つまり、そこには燃やすことによってそれが神に届くというような観念がうかがえる。山形県村山市山の内地区では、オサイトの煙にのせて「受験合格」などの願いごとを書いた半紙を高く舞い上がらせながら燃やす。しかし、煙の勢いが少なく半紙が途中で落ちてくるようなことがあれば願いごとは達成できないとみなされる。各地で小正月の火によって書き初めを燃やし高く舞い上がると書道が上達するなどと考えられたのも同じ発想であろう。

一方、邪悪なものは火の浄化作用によって祓い清められるという考えもみられる。火に対する特別な力を認めるゆえである。その事例として、火であぶった餅を食べると風邪をひかず健康になる、また虫菌にならない。火でタバコを吸うと健康になるなどがある。さらに農作物の豊穰を占って二手に分かれて勝負ごとを行う豊作祈願行事が火祭り行事と併合されている場合も各地で多くみられる。先にみた大磯の左義長のヤンナゴッコなどもその事例といえる。また、これまでみた各地の火祭り行事の共通性として、大磯の左義長まつりや会津地方のサイの神行事で顕著にみられたように、この祭り行事の担い手はかつて子どもたちである地域が多いということである。そこから、これは数え年15歳までの男子集団である「子ども組」が担う祭り行事であったことが考えられる。

## (2)「神送り」に対する「神迎え」説

小正月火祭り行事の意味について、先に年神様は煙にのって帰っていくという考えがあると述べた。そこには小正月の火祭り行事は「神送り」であるという見方が根強

くある。「備後国福山領風俗問状答」には現広島県福山市の左義長（またはとんど）の様子が記されているので紹介する<sup>21)</sup>。

とんどと申、城下町々、十日頃より子供集り、家々の注連縄 松飾りを相集め候、  
（中略）火をかけはやし申候、此時、とんどや左義長や明年もござれや、と人々はやし候ゆへ、焼くをはやすと申候

ここでは、大正月の飾り物を燃やして年神（正月様）の送り火としている様子が読み取れる。明らかに「明年もござれや」と「神送り」をしていることが認められる。

同じように会津地方では「正月様送り」といっており、正月様は燃やす明かりで望月の山へ帰ると信じられている<sup>22)</sup>。これに類似するものとして、「わが国の古い信仰では、正月と盆は同じく魂祭の時で、その際、荒々しい靈魂を追い退ける目的で火祭りを行う」という見方もある<sup>23)</sup>。

他方、これらの「神送り」の見方に対して、かつて山形県置賜地方の小正月火祭り行事を調査した奥村幸雄は、本来は「神迎え」なのではないかという見解を示している<sup>24)</sup>。このことを考えるにあたり、あらためて大崎八幡宮どんと祭の一例をみしてみる。

1月14日夜の大崎八幡宮のどんと祭の始まり（かつての「松焚祭」）は、もともと家々で行うべき松焼き処理を神社境内に持ち寄って行うようになったことによるとみられている。じつはそこには、この地方特有の暁参りの習俗が介在している。つまり、大崎八幡宮では江戸時代から小正月に暁参りまたは暁詣する習俗がみられた。暁参りに来る人々は、いつしか正月の門松や注連縄などを持って訪れるようになり、それが松焼きにつながったと考えられている。『大崎八幡宮の松焚祭と裸参り調査報告書』では、どんと祭はその歴史的経過からみて、暁参りが先にあってそれに松焼きと裸参りが加わって成立していったという見解が示されている。暁参りは松焚祭そしてどんと祭を生み出すもととなった注目すべき習俗といえる。

そこで、暁参り・暁詣の習俗について、1923年（大正12年）1月15日付け「河北新報」には「暁詣と唱へ年重ねの日と定めている田舎の人も大分あるやうであるから、本夜から明朝にかけての松焚祭（どんと祭）は実に元旦三ケ日七草に次ぐ然も有終の美をなす正月の別れである」と記されている（『大崎八幡宮の松焚祭と裸参り調査報告書』）。ここには「年を重ねる」「正月の別れ」という言葉がみられる。庶民は小正月の観念として、この日を大きな節目・区切りとして捉えていたことがわかる。特に「年を重ねる」とは、数え年の時代に1年の終わりの大晦日から元旦にかけて人々が言ってきたことである。このことは、小正月を1年の終わりと始まりの大きな区切りとして捉えていた古い時代の名残ではないかと思われるのである。小正月こそ1年のスタートという観念がうかがえるのである。

こうみてくると、これまでの小正月火祭り行事に根強い「神送り」説がまったく妥当なのか、いささか疑問になってくる。そこで、以下に小正月がもつ予祝の視点を取り入れた疑問点を整理してみる。

①左義長やオサイト、どんと祭などの全国の小正月火祭り行事は予祝行事の側面をもつといわれてきた。それが「神送り」であるとすれば予祝とはいえないのではないか。全国の小正月火祭り行事は、年頭に当たってその年の農産物、海産物の豊作、商売繁盛を祈る予祝の性格を合わせ持っている。あらためて山形県内の小正月火祭り行

事の名称と子どもたちの掛け声の事例をもって、そのことを確認してみたい。すなわち、名称としては「イワイワイ」「ユウユウ」（山形市・天童市・中山町など）がある。「イワイ」は祝い、「ユウ」も祝である。掛け声としては「祝～い、祝～い、作の祝～い」（東根市）がある。「作の祝～い」とは言うまでもなく豊作の祝いである。ここに、その年の豊作や繁昌などがすでにもたらされたことを前提に神に感謝して祝いの唱えごとを発するという予祝構造がみえている。このことに関連して『山形県民俗地図』には以下のように記されている<sup>89</sup>。なお文中では火祭り行事を「さいとう」と記している。

「正月の神は、正月のうち御馳走を食べてぜいたくしたので、この火に笑われながら帰るのだ」と、さいとうの火を送り火とみる地域もあるが、この火にあてたものを食べると、風邪をひかないとか虫歯にかからないという伝承が広く分布していること、この行事を「ゆわいゆわい」と呼ぶ地域があること、正月の主要行事が小正月に集中していることなどから、さいとうの火は、むしろ正月の神迎え的性格をもつものと言えそうである。

これまでみてきたように、小正月火祭り行事には商売繁昌・豊作祈願・豊漁祈願など年占いの要素が多くある。先にあげた神奈川県大磯町の左義長などは、神前にて豊漁の吉凶判断を委ねる典型的行事といえよう。これらの予祝の行事は小正月火祭り行事が「神迎え」の状況においてこそ成り立つのであり、「神送り」では意味をなさないのではないだろうか。

②宮城県の事例などを参考にすれば、大正月の「神送り」である松納めなどが小正月火祭り行事に混入することによって「神送り」観念が強まったことはないだろうか。つまり、宮城県の松納めは、1月14日夕方か15日早朝、年神様の依代である松や注連縄を下ろして屋敷神や鎮守などへ納めたり、庭の木に結びつけたりする。この時「ホーイ、ホイ」と囃しながら持って行くのは、神を送り出す意味がある（『宮城県民俗地図』）。大正月の飾り物を片付ける松納めの時に囃しながら神を送り出す意味が、小正月の火祭り行事の解釈にも適用されていったことが考えられる。このような事例が他にもないかどうか、各地の実態を丹念に調査し把握する必要がある。

③小正月の火祭り行事が「神迎え」の意味をもつとすれば、かつて小正月の1年の始まりの位置づけがより明確になるのではないか。

以上、現時点における疑問点および仮説を提示してみた。いずれにしても、大崎八幡宮の暁参りが「年重ねの日」と考えた庶民の小正月観念をもとに再考すると、奥村幸雄氏の小正月火祭り行事の「神迎え」説は傾聴に値する解釈論であると考えられる。筆者はかつて、奥村氏の見解は重要な論点を含んでおり神迎え説は引き続き検討したい旨の論考をまとめている<sup>90</sup>。

## 5. まとめ

(1)小正月火祭り行事の根源にある考えがいくつかある。本稿では、日差しが衰えて寒

さが頂点に達した冬の時節に、太陽の再生や活力の回復を期待して人々は火を燃やすという捉え方を取り上げた。また、正月は年神様（つまり祖霊）を迎えそして送るという点においてお盆と本質を同じくしている。小正月火祭り行事もお盆の迎え火、送り火と共通する発想が根底にあるという考えも述べた。

- (2)小正月の火祭り行事は神奈川県大磯町の左義長にみられるように、道祖神祭りや子どもたちが小屋に泊まる鳥追い行事など、他の祭り行事と一体化している地域も少なくないことを確認した。特に道祖神祭りは関東西南部や中部地方にその傾向が強くみられる。
- (3)小正月火祭り行事の民俗性はさまざまであるが、本稿では次のような点を指摘した。

一つ目は、年神様は燃やされる煙にのって帰っていくと考えられていることである。また燃やすことによってそれが神に届くというような観念もあり、書き初めを燃やし高く舞い上がると書道が上達するなどと考えられたのも同じ発想ではないかと述べた。

二つ目は、火祭り行事には邪悪なものを火の浄化作用によって祓い清めるという考えもみられる。火に対する特別な力を認めるゆえである。その事例として、火であぶった餅を食べると風邪をひかず健康になる、また虫歯にならない。火でタバコを吸うと健康になるなどが多くの地域でみられる。人々の切実な祈り願いが込められている。
- (4)小正月火祭り行事は、年頭に当たってその年の農産物、海産物の豊作、商売繁盛を祈る予祝の性格を持っていることを述べた。その年の豊作や繁昌などが早々ともたらされたと想定し、人々は神に感謝して祝いの唱えごとを皆で発するというような予祝構造がみえている。
- (5)小正月火祭り行事が予祝の側面をもつのであれば、それは「神送り」ではなく「神迎え」の意味をもつと捉えたほうが理にかなっており、小正月火祭り行事は「神迎え」であるという仮説を提示した。

以上であるが、「神送り」「神迎え」いずれにしても、年の始めに人々は燃え盛る炎に神の力を感得し、祈り願いを託そうとした。現代に生きる私たちは今、そういうことを感じ取る民俗的心意や感性を損なっていないか、あらためて問わなければならない。

おわりに

「3. 東北の小正月火祭り行事」の冒頭に述べたとおり、本稿では各県ごとの『祭り・行事報告書』がほぼ実態を反映した貴重な一次資料であることを前提にして、東北地方の小正月火祭り行事は青森県・岩手県・宮城県では少なく、山形県や福島県ではその多さが顕著であることを示した。山形・福島両県では、そのほとんどが発生的にも運営面でも、町内に住む人々によるその地域エリアで行われる祭り行事になっている。この北東北と南東北の相違はどこから来ているのか。本稿ではこのことについて考察のなかに盛り込むことができなかつたが、『報告書』以外のさらなるデータ収集も含めて今後の検討課題としたい。また、小正月火祭り行事は「神送り」か「神迎

え」かという問題について、じつに本質的な問題として引き続き考察を重ねていきたい。

小正月火祭り行事がまた巡って来る季節となった。大正月の飾り物などの廃物を燃やす行事という意識だけでなく、古くから人々は燃え盛る炎にどんな祈りと願いの心を持ったのかを思い巡らしながら、小正月火祭り行事の本質というものを考察し続けたいと思っている。

### <引用・参考文献>

- (1) 「年中行事絵巻」小松茂美編『日本絵巻大成8』所収 中央公論社 1977年
- (2) 「徒然草」『日本古典文学大系 第30』所収 岩波書店 1957年
- (3) 「上杉本洛中洛外図屏風」（米沢市上杉博物館所蔵）
- (4) 「神樹編」『定本柳田国男集19』所収 筑摩書房 1999年
- (5) 『近江八幡の火祭り行事』近江八幡市教育委員会 1998年
- (6) 星野紘・芳賀日出男監修『日本の祭り文化事典』東京書籍 2006年
- (7) 『神奈川県史 各論編5 民俗』神奈川県 1977年
- (8) 『勝山市史 第1巻 歴史と風土』勝山市 1974年
- (9) 『仙台市文化財調査報告書 天賞酒造に係る文化財調査報告書』仙台市教育委員会 2006年
- (10) 『大崎八幡宮の松焚祭と裸参り調査報告書』仙台市教育委員会 2006年
- (11) 都道府県別日本の祭り・行事調査報告書集成『北海道・東北地方の祭り・行事 1, 2』海路書院 2009年
- (12) 『岩手県の祭り・行事調査報告書』岩手県教育委員会 2000年
- (13) 図録『火とまつり』岩手県立博物館 1994年
- (14) 竹内利美『日本の民俗 宮城』第一法規 1974年
- (15) 『宮城県民俗分布図』宮城県教育委員会 1977年
- (16) 『宮城県の祭り・行事調査報告書』宮城県教育委員会 2000年
- (17) 『山形県の祭り・行事調査報告書』山形県教育委員会 2004年
- (18) 戸川安章『日本の民俗 山形』第一法規 1974年
- (19) 『福島県の祭り・行事調査報告書』福島県教育委員会 2005年
- (20) 『サイの神調査事業報告書 三島のサイの神』三島町教育委員会 2002年
- (21) 「備後国福山領風俗問状答」『日本庶民生活史料集成』第九巻所収 三一書房 1972年
- (22) 『会津若松市史23 会津若松の年中行事』民俗編3 会津若松市 2004年
- (23) 西角井正慶編『年中行事辞典』東京堂出版 1958年
- (24) 奥村幸雄「置賜地方の正月の火祭オサイト」『山形民俗』第7号所収 山形県民俗研究協議会 1993年
- (25) 『山形県民俗地図－民俗文化財分布調査報告書－』山形県文化財保護協会 1980年
- (26) 菊地和博「小正月の火祭り行事とその解釈をめぐって」『山形民俗』第24号所収 山形県民俗研究協議会 2010年